

河川事業におけるワークショップ手法の事例研究

～おさえ井堰自然公園化プロジェクトを通して～

福岡大学工学部 学生員○畑田勇貴 福岡大学工学部 正会員 渡辺亮一

福岡大学工学部 正会員 山崎惟義 九州大学大学院 正会員 島谷幸宏

1. はじめに

都市計画やまちづくりを行政の担当者まかせにせず、市民に開かれたものにしようという声は、1970年代から徐々に高まっており、今では、まちづくりに市民が参加・参画することは当たり前の時代になった。事業を行う上でワークショップを行うか否かでは大きな違いがあるといわれている。ワークショップを改修前に行わなかった事例として、那珂川町にある裂田水路の改修工事が挙げられる。この裂田水路は日本書紀に記載されている日本最古の水路であり、貴重な生物が多く生息する。ここでは計画を立てる前にワークショップを行うべきであったが、改修に着手した後にワークショップを行ったために、住民から事業の進め方について意見が飛び交うことになり、史跡保全という点において手遅れとなった。逆にワークショップを計画前に行った事例として、佐賀県、松浦川につくられた遊水地であるアザメの瀬での自然再生事業が挙げられる。ここでは事業を進める前に、検討会をこまめに開き、参加者を固定せず自由参加にし、住民の参加の機会を広げている。検討会も学識者をアドバイザーと位置づけ、正確な知識が参加者に伝わるような仕組みにしている。その結果、住民の知識のレベルが高くなり、住民の持続的な活動につながるという、事業そのもののレベルが高いものとなっている。

2. 目的

本研究を進めるに当たって、福岡県那珂土木事務所の協力を得て、ワークショップを行う場を作っていた。この研究の目的は、ワークショップを促進させ、住民にわかりやすく、参加しやすい企画を行うことと、河川事業における生態景観模型の有効性を確認することにある。このワークショップを通して、貴重な水生生物や昆虫が保全できる魅力的な空間を住民の合意の下で創出できれば、福岡県における今後の河川事業に対してのモデルケースになればと考えている。

3. おさえ井堰周辺の現状

おさえ井堰は、那珂川の中流域に位置している。この周辺には福岡県のレッドデータに記載されているスナヤツメや準絶滅危惧種であるベニイトトンボなども生息しており、自然豊かな環境となっている。おさえ井堰の下流部に大きな雑木林（写真1）があり、地元の住民から荒れた状態をどうかしてほしいと要望があった。そこで福岡県那珂土木事務所は、親水公園化プロジェクトを立案し、整備しようとしている。しかし、この雑木林には希少種にとって大事な木もある。希少種に配慮しない計画を進めた場合には、生息環境が大きく変化し、多くの生物が絶滅する可能性があり、改修方法には注意しなければならない状況である。



写真1 改修地点

4. 研究手法

4.1 ワークショップ提言のための資料作り

ワークショップを実現させるために、過去、那珂川町の環境を考える会で行われたおさえ井堰周辺の過去15年分の生物調査結果を用意した。またワークショップのスケジュール、ワークショップの回ごとの目的、自然公園化にするメリット等をまとめて用意し提言した（写真2）。

4.2 ワークショップの企画

ワークショップは長時間、また短期間に行うと参加者の数が減ると言われている。そこで今回は月1回ワークショップを行うこととし、タイムスケジュールは2時間を目安とすることにした。内容は、簡単に水質をチェックできるバックテストや、歴史についての対話集会、おさえ井堰周辺の探索等を企画した。



写真2 ワークショップ提言の様子

4.3 生態景観模型作り

ワークショップを行う上で住民の方々との円滑な意思疎通とイメージの共有が重要である。平面図や縦横断図だけではその具体の姿を思い浮かべることができないが、立体的な表現ができる模型は、言葉や図面などでは表現しにくい整備イメージを具体的に伝えることができる。そこで福岡県那珂土木事務所に図面をいただき、現地の写真と照らし合わせながら、模型を作り（写真3）ワークショップに利用することにした。改修部分は組み替え式にしており、話し合いの中で出てきた案の模型をはめ込み、住民が改修後のイメージをしやすい模型に仕上げている。



写真3 模型完成写真

4.4 ワークショップ開催

ワークショップを行う上で問題となるのが、参加の呼びかけや開催場所である。今回は那珂川町町議員に地元の住民に声をかけていただいた。ワークショップでは、福岡大学の先生にアドバイザーをしていただき、行政、住民と両者の意見の仲介をしていただいた。模型を囲んでの歴史や生物の話、またどの場所を改修するかを説明した（写真4）。また現地確認すること（写真5）により、ゴミの不法投棄や残した方が良い木、またパックテストにより水質の検査をし、那珂川の水質を確認した。



写真4 ワークショップの様子

5. 結果及び考察

企画の段階から住民に参加してもらうことで、住民の納得を得ながら事業を進めていくことができる。企画が先に決まってしまうのは住民の意見は反映しにくい。今回のワークショップでは、行政が今どのような状況にあり、現実的に工事に着手できる時期がいつ頃になるか、妥協できる範囲は住民の意見を反映するなど、隠すことなく住民に接した態度また、納得できるまで時間を取りたい、今後の事業の進め方に参考にしたい、という謙虚な態度により、住民も行政と協力していきたいという意思や期待を伝えた。また生態景観模型を使いながら説明することにより、住民の明確な希望を行政に伝えることができ、住民の方々が模型を指差しながら様々な意見するなど、ワークショップが促進することを確認した。今回のワークショップの企画は、行政と住民という壁をなくし、信頼関係を芽生えさせ、住民の合意を得ることに成功したと考える。



写真5 現地確認

6. まとめ

合意形成において、なるべく早い段階からはじめることと、合意形成の場に意思決定できる行政の担当者が参加することが必要である。現地を確認する作業で、行政と住民が共に図面を見ながら歩き、生物や水質、ゴミの確認を行うことで、住民の方は行政への要望を伝えやすく、行政側も改修がどこまでが可能か住民

側に直接伝える様子もうかがえた。企画者は、このような場を作り、信頼関係（表1）が芽生えるような環境を作ることが大事だと考えられる。また模型を利用することは、和やかな雰囲気をつくることにもなり、知識や認識の共有、住民の理解度や発言において、ワークショップを促進する大事な材料であるといえる。今後、更にワークショップが促進するよう、住民が出した案をまとめた模型を作り、現段階でどのようなイメージなのか模型を見ながら話し合う場を作ること、住民の知識が深まるような企画、材料を提案していくことが課題だと考える。

参考文献 伊藤雅春・大久手計画工房：参加するまちづくり，百の知恵双書，2003 2) 佐藤滋：まちづくりデザインゲーム，学芸出版社，2005 3) 日本まちづくり協会：地域の計画・まちづくり，2002

表1 信頼関係

行政	住民
時間をつくる	⇔ 時間をつくる
隠さない	⇔ エゴを持ち出さない
間違いを恐れない	⇔ 間違いを攻めない
嘘をつかない	⇔ 疑わない